

## 四 イザヤの召命 6章

6章の召命と53章の受難のしもべ像は、新約でのペテロの召命やゲツセマネと同じように親しまれている。イザヤの召命の記録を読み、感激して献身の生涯に入った人は非常に多い。しかし一方において、この6章ほど誤解されたまま読まれている章も少ないのではなかろうか。それは、数節のみが断片的に読まれて、統一的な読み方がなされないためである。

6章における大きな問題点は、次の5つである。(1) 召命の時期。(2) この体験が実際にどのような状況の下でなされ、どのように表現されているか。(3) 「心をかたくなにするように宣教せよ」との命令の不思議さ。(4) 「いつまでですか」(11節)との質問と、主の答えが示している時がいつを指しているのか。(5) この召命の体験と、イザヤ書全体のメッセージとのかかわり。

### a 神を見る (6:1-5)

1節 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、

בְּשֵׁנֶת־מֹוֹת הַמֶּלֶךְ עֲזִיָּהוּ וַאֲרָאָה אֶת־אֱלֹהֵי יְיָ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:1

עַל־כִּסֵּא רָם וְנִשְׂא וְשׁוּלְיֵי מַלְאִים אֶת־הַהֵיכָל:

<sup>LXT</sup> Isaiah 6:1 καὶ ἐγένετο τοῦ ἐνιαυτοῦ οὗ ἀπέθανεν Οζίας ὁ βασιλεὺς εἶδον τὸν κύριον καθήμενον ἐπὶ θρόνου ὑψηλοῦ καὶ ἐπηρμένου καὶ πλήρης ὁ οἶκος τῆς δόξης αὐτοῦ

<ウジヤ王が死んだ年>は、前 740 年。ウジヤ王は靈的にも実際的にも祝福された人生のスタートを切った( 歴 26 : 4-5)。しかし、高ぶりと不信の罪により神に打たれ、らい病にかかって死んだ( 列 15 : 5-7、 歴 26 : 16-23)。それは単に王個人の悲劇にとどまらず、ユダの運命を暗示するものであった。この点で、5章最後の「ユダの絶滅」のメッセージは、この6章のスタートとかかわりを持っている。王の死は、やがて下されるユダへのさばきの前触れであった。それにもかかわらず、ユダは無関心で、不信仰と不道徳の生活を送っている。イザヤの召命は、このような歴史的背景と、それが青年イザヤにどのような心理的影響を及ぼしたかについての理解の上に立って考察してゆかねばならない。

ここに記録されている召命が、初めての召命体験であるか、すでに預言者として活動していたイザヤの再召命であるかについては、意見が分かれる。カルヴァンは再召命である

と考える。それは、イエスの弟子たちの場合にも見られるとおりである(ヨハ 20:21-22、使 2:3 以下)。しかし一般には、第一の召命ととる場合が多い(ヤングなど)。その理由は、初めての召命でなければ5節のような告白はありえない、と考えるからである。この場合、なぜ6章が1-5章のメッセージの前に置かれぬのかという疑問が生じるが、それは、召命体験の記録の前に初期預言のメッセージを置いたものとする。また、ウジヤ王の死んだ年に召命を受けたとすれば、1:1の「彼が、・・・ユダの王ウジヤ・・・の時代に見たものである」との表題と矛盾するのではないかと疑問が生じるが、それは召命体験が、ウジヤ王の死んだ年でなく、ウジヤ王の死ぬ年であったと解釈することで説明される。つまり、イザヤは、ウジヤ王が死ぬ直前に、預言者としての活動を開始したと考えるのである(デリッチ)。この説明は不可能ではないが、6章全体の感じから言えば、ウジヤ王の死んだ年であっても、死後に召命体験があったと解釈するほうが自然である。また、すでにかかりのキャリアを積んだ教職者が、深い罪認識の体験をもう一度することも多い(ロマ 7:14 以下、テモ 1:15)。5節があるから第一の召命でなければならぬ、ときめつけることはできない。

一方、6章の記録を、必ずしも事実ととる必要はないとする説もある。「この記録は召命当時の経験そのままというよりも、むしろその後の実際経験に照らして省察吟味されたもので、単なる歴史的記録ではなく、最も精練された信仰的記録であるといわねばならぬ」(手塚)。

<ウジヤ王が死んだ年に>の後には接続詞ワウがあるから、一呼吸の感じである。「そして私は主を見た」となっている。協会訳では、イザヤの見た焦点がはっきりしない。「イザヤが主を見た」ということが6:1の中心であり、6章全体の出発点なのである。この焦点がはっきりすると、ここに重要な神学的問題が提供されていることも明らかになる。第一に、

ここで用いられる<主>は、普通の主従関係に用いられる אֲדֹנָי Aアドナーイである。注意深く読んでゆくと、6:1では、<高くあげられた王座に座しておられる主を見た>と言われていても、その主がどのような形であったかは何も言われていない。更に不思議なことに、イザヤが実際には「どこで」主を見たかについても言われていない。普通は、エルサレム神殿で祈っていた最中の体験であると考えられているが、本文そのものは沈黙している。また前述のように、<ウジヤ王が死んだ年>であっても、確実な日はわからないし、一日のうちの昼であったか夜であったかもわからない。「イザヤが主を見た」ことは事実であっても、その事実の起こった日時、場所、及び主の外見については不明なのである、そして、そのことこそ、神の啓示の本質とかかわっている。聖書の他の箇所では、だれも神を見た者はなく、見た者は死ぬと言われている(出 33:20、ヨハ 1:18、テモ 6:16)。しかし一方では、「神を見る」ということも真理である<マタ 5:8>。イザヤの召命の出発点は、「神を見た」という現実にある。しかしそれは、「神を見ることも描くこともできない」という真理を含む現実であった。イザヤは、<主>という用語の選び方をはじめ、この部分

の表現を通して、注意深く、神の啓示の本質を明らかにしてくれている。

<高くあげられた>は<王座>にかかり、神の至高性を表している。新改訳では、<そのすそは神殿に満ち>を2節にかけている。普通の訳(ルター訳、英欽定訳、英標準訳、協会訳など)や、注解(カルヴァン、ヤング)は、前にかけて「そのすそは神殿に満ちていた」と切る。<満ち>と「立っていた」(2)は分詞であるし、1節の焦点が「主を見た」ことにあるとすれば、新改訳は思い切ってそれを表現しようとした積極的な訳として評価すべきである。エルサレム訳は、1-2節を一つのまとまった区分として扱っている。

2節 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ6つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、2つで両足をおおい、2つで飛んでおり、

שֶׁרָפִים עֹמְדִים מִמַּעַל לֹו שֵׁשׁ כַּנְפִים שֵׁשׁ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:2

כַּנְפִים לְאַחַד בְּשֵׁתַיִם יְכַסֶּה פָּנָיו וּבְשֵׁתַיִם יְכַסֶּה רַגְלָיו

וּבְשֵׁתַיִם יְעוֹפֵף:

LXT **Isaiah 6:2** καὶ Σεραφιν εἰστήκεισαν κύκλω αὐτοῦ ἕξ πτέρυγες τῶ ἐνὶ καὶ ἕξ πτέρυγες τῶ ἐνὶ καὶ ταῖς μὲν δυσὶν κατεκάλυπτον τὸ πρόσωπον καὶ ταῖς δυσὶν κατεκάλυπτον τοὺς πόδας καὶ ταῖς δυσὶν ἐπέταντο

<セラフィム>は、御使いの意味では6章だけに用いられており、ケルビム(創3:24、出25:18-22、エゼ10章、28:14)や、ミカエル(ダニ10:13,21、12:1、黙12:7)とは区別される。語源的には「燃える」という意味で、「燃える蛇」すなわち毒蛇を表すのに用いられる(民21:6,8、申8:15、イザ14:29、30:6)。御使いセラフィムには、顔と手と足があり、6つの翼を持ち、飛び翔りながら、神を賛美する。その姿は蛇に似ていたと主張する学者がいるが(ドゥーム)、本文は何も言っていない。セラフィムは複数であるが、その数については、注解者にとってまちまちである。2つの翼で<顔をおおう>のは、尊敬とおそれを示す象徴的行為であり、<両足をおおう>のは、謙遜を表している。

3節 互いに呼びかわして言っていた。

「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。  
その栄光は全地に満つ。」

וְקָרְאוּ זֶה אֶל־זֶה וְאָמְרוּ קְדוֹשׁ קְדוֹשׁ קְדוֹשׁ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:3

יְהוָה צְבָאוֹת מְלֵא כְּבוֹדוֹ׃

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:3** καὶ ἐκέκραγον ἕτερος πρὸς τὸν ἕτερον καὶ ἔλεγον ἅγιος ἅγιος ἅγιος κύριος σαβαωθ πλήρης πᾶσα ἡ γῆ τῆς δόξης αὐτοῦ

4節 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。

וַיִּנְעֻזוּ אֲמוֹת הַסְּפִיִּים מִקּוֹל הַקּוֹרְאִים וְהַבַּיִת <sup>WTT</sup> Isaiah 6:4

יִמְלֵא עָשָׁן׃

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:4** καὶ ἐπήρθη τὸ ὑπέρθυρον ἀπὸ τῆς φωνῆς ἧς ἐκέκραγον καὶ ὁ οἶκος ἐπλήσθη καπνοῦ

セラフィムは<互いに呼びかわして>、聖なる神を賛美した。<聖なる>(קְדוֹשׁ)カドーシユ)は、イザヤ書において最も重要なことばの一つである。その意味については 5 : 16 注解。<万軍の主> 1 : 9 注解。ここに三位一体の思想が明確に現されていると、デリッチやヤングは主張するが、カルヴァンは慎重論をとっている。「御使いたちが三位格であられる唯一の神をここで描いていることに疑いを持つものではないが、われわれの信条を証明する時、異端のそしりを受けないために、よりよく結論をはっきりさせることのできる聖句を選ぶべきである。実際において、この(セラフィム)繰返しは、うむことのない持続性を表現している。」

<栄光>(כְּבוֹד)カーボード)(その他、富、美しい、尊ばれる、誇った、豊かなと訳される)は、イザヤの好んで用いたことばで、イザヤ書全体で 38 回も使われている。その約半分は、主の栄光として用いられている(3 : 8、6 : 3、10 : 16、24 : 23、35 : 2、40 : 5、42 : 8,12、43 : 7、48 : 11、58 : 8、59 : 19、60 : 1-2、66 : 18-19、19)。また、メシヤの栄光については 4 箇所用いられている(4 : 2、11 : 10、22 : 23、62 : 2)。

主は高く上げられた王座に座し、セラフィムは天空を飛びかけりつつ呼び交わし言うが、不思議なことに、主の栄光は、天でなく<全地に満つ>と叫ぶ(民 14 : 21、詩 72 : 19)。<叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ>。カルヴァンが言うように、地震の直接原因がセラフィムの声であったととる必要はない。<煙>も、セラフィムの叫ぶ口からでる煙状の息ではないであろう。4 : 5 の「煙」とも関係はない。おそらく、神殿の祭壇でいけにえをささげる時に立ち上る煙が連想されていたと思われる。おそれと恐怖に満たされていたイザヤは、神殿に満ちた衣のすそと煙によって、十分な見通しを得ることができず、ただただ主のみいつと栄光の輝かしさに圧倒されていた。

5 節 そこで、私は言った。

「ああ。私は、もうだめだ。  
私はくちびるの汚れた者で、  
くちびるの汚れた民の間に住んでいる。  
しかも万軍の主である王を、  
この目で見たのだから。」

וְאָמַר אֲוִילִי כִּי־נִדְמִיתִי כִּי אִישׁ טָמֵא־שִׁפְתָיִם <sup>WTT</sup> Isaiah 6:5

אֲנֹכִי וּבְתוֹךְ עַם־טָמֵא־שִׁפְתָיִם אֲנֹכִי יוֹשֵׁב כִּי אֶת־הַמֶּלֶךְ

יְהוָה צָבָאוֹת רָאוּ עֵינָי:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:5** καὶ εἶπα ὦ τάλας ἐγὼ ὅτι κατανένυγμαὶ ὅτι ἄνθρωπος ὢν καὶ ἀκάθαρτα χεῖλη ἔχων ἐν μέσῳ λαοῦ ἀκάθαρτα χεῖλη ἔχοντος ἐγὼ οἰκῶ καὶ τὸν βασιλέα κύριον σαβαωθ εἶδον τοῖς ὀφθαλμοῖς μου

神の栄光と聖さに圧倒されたイザヤは、<ああ。私は、もうだめだ>と叫んだ。不義と腐敗に満ちた社会を見て、青年イザヤの心は燃えていたに違いない。汚れを知らない青年の心は、社会の不正を見てうずき、しばしば破壊的な行為に駆り立てられる。すでに預言者の活動に入っていたイザヤは、ウジヤ王の死と、それに伴う国家の不信、腐敗、無知を見て、更に強力な活動を始める衝動を持ったであろう。しかし、その前にまず神との関係をただしておく必要があった。そこでイザヤが知らされたことは、自分が神の側に立って、民を教え叱責し預言する立場にはなく、自分こそが、神のさばきを受けて、滅ぼされた存在であるという事実であった。<ああ> 欄外注、1 : 4 注解。<ああ。私は、もうだめだ>は、単なる絶望的な感情の表現ではない。「わざわざだ。私はだめだ。滅んでいる」と訳すと、原文の意味に最も近い。「滅びるばかりだ」(新共同訳)なのでなく「滅んでいる」のである(

15:1、エレ47:5、ホセ4:6、10:7、ゼパ1:11)。自分だけが正しいと思っている者は、神の御前で、最も傲慢な罪びとであることを暴露される( コリ10:12)。カルヴァンは、この動詞の原意が「静かである」というところから、おそれのあまり沈黙したと解釈するが、文脈から見ると、イザヤが自分の罪人であること、すなわち霊的な死を自覚したと解釈すべきである。<汚れた>ものはすべて、神の御前から退けられる(レビ11:44、15:31、18:28-30、22:3)。<<ちびる>が汚れていることは、心も汚れていることを意味する(ヤコブ3:9-12)。

更に、イザヤは、自分が汚れているだけでなく、<民>も汚れており、その中に自分があると告白している(ネヘ1:6、ダニ9:20)。ここでは、預言者における「個」の意識と、「集団の一員」としての意識が、有機的に結合されている。この有機的な関係が把握されて初めて、預言者の召命とそのメッセージが理解されるのである(本注解書旧約4「預言書について」p44-45)。

<万軍の主である王を、この目で見たと>は、もちろん、神の外見的な姿を見たという意味ではない(6:1 注解)。しかし、どのような形式であれ、神を見たら死ぬという信仰が、イスラエル人の間にあった(出33:20、士6:22、13:22)

#### b 罪の赦し(6:6-7)

6節 すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。

וַיֵּצֵא אֵלַי אֶחָד מִן־הַשְּׂרָפִים וּבְיָדוֹ רֶצֶפֶת <sup>WTT</sup> Isaiah 6:6

בְּמִלְקָתִים לָקַח מֵעַל הַמִּזְבֵּחַ:

<sup>LXT</sup> Isaiah 6:6 καὶ ἀπεστάλη πρὸς με ἐν τῶν σεραφιν καὶ ἐν τῇ χειρὶ εἶχεν ἄνθρακα ὄν τῇ λαβίδι ἔλαβεν ἀπὸ τοῦ θυσιαστηρίου

病人であれば、どのような重症であっても、元気になる望みがあるが、死んでしまえばすべては終わりである。また、死人は自分から生き返ることはない。霊的な死においても同じである。5節でイザヤが霊的な死を自覚し、それが事実であったとすれば、5節と6節の間には深い断絶がある。それゆえ、6節の初めの<すると>は、軽々しく読み過ぎてはならない。神は救いのわざにおいて、徹底的なイニシアチブをとられる。その時と場所と方法の一切は、神の主権と自由のもとにある。セラフィムの行為と宣言によって罪の赦しが与えられることは、イザヤの想像を全く超えるものであった。<燃えさかる炭>(רֶצֶפֶת)

⊠(リツパー)は、「燃えさかる石」とも解釈される(ヤング)。その場合は、香をたく祭壇の石と考えられる。70人訳は、新改訳と同じく、ἄνθραξ ⊠(アンスラクス(炭))と訳している。その場合は、いけにえが焼かれて、炭状になったものを意味している。

7節 彼は、私の口に触れて言った。

「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、  
あなたの不義は取り去られ、  
あなたの罪も贖われた。」

וַיִּנָּע עַל־פִּי וַיֹּאמֶר הִנֵּה נֹגַע זֶה עַל־שִׁפְתַיִךְ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:7

וְסָר עֲוֹנֶיךָ וְחַטָּאתֶיךָ תִּכַּפֵּר:

<sup>LXT</sup> Isaiah 6:7 καὶ ἤψατο τοῦ στόματός μου καὶ εἶπεν ἰδοὺ ἤψατο τοῦτο τῶν χειλέων σου καὶ ἀφελεῖ τὰς ἀνομίας σου καὶ τὰς ἁμαρτίας σου περικαθαριεῖ

神の救いの御手は人格全体に及ぶが、具体的には、最も弱く、最も汚れたところに恵みが注がれるという形をとる。イザヤの場合も、「汚れたくちびる」がそれであった。ここで、セラフィムの行為が救いのしるしとなり、セラフィムの宣言が救いのことばとなっている。カルヴァンは、これを聖礼典にたとえて、しるしより、みことばが優先すべきであると主張する。「われわれは、聖礼典の重要な部分は、みことばであることを学ばなければならない。みことばなくしては、礼典は墮落の手段になる。それは、今日の法皇制の下において、聖礼典が茶番劇化しているのに見られるとおりである。」しかし、同時に、カルヴァンは、真理のことばをしるしから切り離してはならないことも強調している。ここでのセラフィムの宣言では、<これがあなたのくちびるに触れたので>と、救いの行為にまず言及している。

<不義>(עוֹן ⊠(アーウォーン))、<罪>(חַטָּאת ⊠(ハッターズ))については 1:4 注解。<贖

れた>は、כַּפֵּר ⊠(カーファル)の強意受身語幹で、原意は「おおわれる」。22:14、27:9

では、単に「赦される」と訳される。強意能動語幹は、犠牲によって罪を贖うという重要なレビ的用語である(レビ4:26、5:18、6:7、17:11等)。同じ語源から、契約の箱の「贖いのふた」(כַּפֹּרֶת ⊠(カッポーレス))ということばが作られている(出25:17,30:6、31:

7。ἱλαστήριον ⊠(ヒラステーリオン)、ロマ3:25、ヘブ9:5)。イザヤは、レビ的な犠牲による贖いの祭儀を通して、セラフィムの行為と、それに伴う罪の赦しの宣言を理解した

に違いない。それゆえ、1:11、13の預言に見られたいけにえの拒否のメッセージと違った祭儀理解が、ここに示されている。

ルターが言っているように、死んでいたイザヤが、神の一方的な赦しの行為とことばによって復活したのである。

c 召命(6:8)

8節 私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」

וְאַשְׁמַע אֶת־קוֹל אֲדֹנָי אֲמֹר אֶת־מִי אֲשַׁלַּח וְיָמִי <sup>WTT</sup> Isaiah 6:8

יִלְדָּדְלֵנוּ וְאֲמֹר הִנְנִי שְׁלַחְנִי:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:8** καὶ ἤκουσα τῆς φωνῆς κυρίου λέγοντος τίνα ἀποστείλω καὶ τίς πορεύσεται πρὸς τὸν λαὸν τοῦτον καὶ εἶπα ἰδοὺ εἰμι ἐγὼ ἀπόστειλὸν με

イザヤの召命体験は「主を見た」ということが出発点であったが、それは単なる視覚の問題ではなかった。セラフィムの声は、イザヤの聴覚に響き、煙は臭覚に訴えた。さらに「燃えさかる炭」は、触覚から味覚までを貫いた。宗教体験は、単なる知的認知とか感情にとどまるものではなく、五感を揺り動かし、意思をゆさぶり、行動へと及んでゆく。罪の赦しの体験は、神の徹底的な主権とイニシアチブの下に行なわれたが、それに続く召命において、神はイザヤに応答を求められる。〈だれを遣わそう〉という疑問は、神ご自身への問いかけであり、この時代の困難な宣教のわざに耐えうるしもべを選ぶための厳しさを示している。救いの御手はすべての人に及ぶけれども、神のみわざを遂行する人物には、その事業の困難さに応じて、特別の召しと賜物が要求される。〈だれが、われわれのために行くだろう〉という疑問は、遣わされる人物の自発的な応答を求める。

<われわれ>と複数形が使われているが、それについて幾つかの解釈がある。70人訳は、<われわれ>を削除して、「だれがこの民に行くだろう」としている。カルヴァンは、6:3の注解の時と違って、ここでは創1:26と同じく三位一体の神が言及されていると解釈したい、と言っている。ヤングも同じ立場であるが、その主張はもっと強く、明確であり。一方、ランゲ、デリッチは、セラフィムを含めて<われわれ>と言われていると解釈する。しばしば、神の御座の回りに会議が召集されたと書かれているからである(列22:19-22、ヨブ1:6以下、2:1以下、詩篇89:7)。リューポルドは、前者を当然のこととしながら、後者の説を採用するという妥協をしている。

神の質問に、イザヤは直ちに<ここに、私がおります。>と返事をした。まことの信仰を

持つ人は、神が召される時、召しの内容、方法、時期について、討議を重ねてから慎重に返事をする人ではない。何らの疑問もはさまず、すぐ<ここに、私がおります。>といえる人である。アブラハムも(創 22 : 1)、モーセも(出 3 : 4)、神の呼びかけに全く同じ返事をしている。

しかし、イザヤに与えられるメッセージの内容は、想像も及ばない厳しいものであった。

#### d 心をかたくなにするメッセージ (6:9-13)

これまで、イザヤの召命物語に感激し、主に献身を誓った人たちは何人いるだろう。それにもかかわらず、6 : 9 以下ほど無視されてきた本文も少ないと思われる。それは、「心をかたくなにするメッセージ」を理解することが、非常に難しいからである。

ゲゼニウスは、6 : 9 の命令形を未来形ととることによって説明しようとした。ルターは「わたしの民」と呼ばれず「この民」と呼ばれていることに注目し、神はもはやイスラエルを捨ててしまわれたと言う。「神の隠れた御旨をせんさくして、自分を苦しめることはやめようではないか」と言って、解釈を避けている。また、カルヴァンやアレグザンダーは、神の予知がそこに示されていると考える。

私たちは、イザヤ書全巻を通じて最も重要な思想であり、新約聖書にもしばしば引用されている「心をかたくなにするメッセージ」の解釈を避けて素通りすることは許されない。それにはまず、本文そのものを忠実に検討してみる必要がある。

#### 9節 すると仰せられた。

「行って、この民に言え。

『聞き続けよ。だが悟るな。

見続けよ。だが知るな。』

וַיֹּאמֶר לְךָ וַאֲמַרְתָּ לְעַם הַזֶּה שְׁמַעוּ שְׁמַעוּ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:9

וְאַל-תְּבִינּוּ וְרֵאוּ רֵאוּ וְאַל-תִּדְעוּ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:9** καὶ εἶπεν πορεύθητι καὶ εἶπὸν τῷ λαῷ τούτῳ ἀκοῆ ἀκούσατε καὶ οὐ μὴ συνῆτε καὶ βλέποντες βλέψετε καὶ οὐ μὴ ἴδητε

10 節 この民の心を肥え鈍らせ、  
その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。  
自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、  
自分の心で悟らず、  
立ち返っていやされることのないように。」

הַשְׁמִין לְבַהֲעֵם הַזֶּה וְאַזְנֵי הַכְּבֹד וְעֵינָיו <sup>WTT</sup> Isaiah 6:10

הַשֶּׁעַ פִּן־יִרְאֶה בְּעֵינָיו וּבְאַזְנֵי יִשְׁמַע וּלְבָבוֹ יִבִּין וְשֵׁב וּרְפֵא  
לוֹ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:10** ἐπαχύνθη γὰρ ἡ καρδία τοῦ λαοῦ τούτου καὶ τοῖς ὠσίν αὐτῶν βαρέως ἤκουσαν καὶ τοὺς ὀφθαλμοὺς αὐτῶν ἐκάμμυσαν μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ὠσίν ἀκούσωσιν καὶ τῇ καρδίᾳ συνῶσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν καὶ ἰάσομαι αὐτούς

第一に注目すべきことは、<聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。>が、イザヤが民に向かって実際に伝えなければならないメッセージの内容になっていることである。しかし、実際に預言者がこのようなことばをそのまま告げるといふことがありうるだろうか。また、告げたとしたら、どのような結果が生じるだろうか。伝道集会で説教者がこのように語ったらどうなるか想像してみて、この表現のもつ不思議さに驚くところから釈義は出発しなければならない。

<聞き続けよ><見続けよ>は、それぞれの動詞の命令形と不定詞独立形が結び付けられており、意味は、連続とか繰返しを表す。新共同訳「くりかえし聞くがよい」「くりかえし見るがよい」。連続にしても繰返しにしても、一体何を見聞きし、何を悟ってはならないのか。直接的には、聖なる神にお会いして罪の赦しを受けた体験のあかしを指すと思われる(使 22 : 6 以下、26 : 12 以下)。その体験のあかしを聞いても、人々はかえって心をかたくなにする(使 22 : 22、26 : 24)。もう一つは、1-5 章のメッセージを指すと考えることができる。メッセージを聞いても「イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない」(1 : 3)。彼らの運命は不治の病にかかった病人と同じであり(1 : 5 以下)、ウジヤの死はその象徴であり、先触れであった。これらのメッセージは、イスラエルの歴史と、その中に織り成される事件を「しるし」として彼らの前に示したのであるが、人々は、これを見聞きしても、悟ることがなかった。人々の心は、出エジプトの民がカナンの地を目指して荒野を旅した時と変わるところがなかった。「あなたが、自分の目を見たあの大きな試み、それは大きなしるしと不思議であった。しかし、主は今日に至るまで、あなたがたに、悟る心と、見る目と、聞く耳を、下さらなかった」(申 29 : 3,4)。

【新約聖書におけるイザヤ書 6 : 9-10 の引用】

イザヤ書 6 : 9-10 は、新約聖書では 5 箇所引用されている(マタ 13 : 14、15、マル 4 : 12、ルカ 8 : 10、ヨハ 12 : 40、使 28 : 26、27。ロマ 11 : 8)。

マタイ 13 : 14 こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。

『あなたがたは確かに聞きはするが、  
決して悟らない。  
確かに見てはいるが、決してわからない。』

<sup>BNT</sup> **Matthew 13:14** καὶ ἀναπληροῦται αὐτοῖς ἡ προφητεία Ἡσαΐου ἡ λέγουσα ἀκοῆ  
ἀκούσετε καὶ οὐ μὴ συνῆτε, καὶ βλέποντες βλέψετε καὶ οὐ μὴ ἴδητε.

マタイ 13 : 15 この民の心は鈍くなり、  
その耳は遠く、  
目はつぶっているからである。  
それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、  
その心で悟って立ち返り、  
わたしにいやされることのないためである。』

<sup>BNT</sup> **Matthew 13:15** ἐπαχύνθη γὰρ ἡ καρδία τοῦ λαοῦ τούτου, καὶ τοῖς ὠσὶν βαρέως ἤκουσαν  
καὶ τοὺς ὀφθαλμοὺς αὐτῶν ἐκάμμυσαν, μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ὠσὶν  
ἀκούσωσιν καὶ τῇ καρδίᾳ συνῶσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν καὶ ἰάσομαι αὐτούς.

まず、マタイの福音書 13 : 14-15 をイザヤ書 6 : 9-10 と比較してみよう。前半は、イザヤ 6 : 9 が、神のお命じになった宣教の内容になっているのに対し、マタイ 13 : 14 は、民の側での受け取り方として描写している。また、「聞く」と「見る」が、イザヤ 6 : 9 では持続か繰り返しであるのに対し、マタイでは現実性の表現となっている。後半でも、イザヤ 6 : 10 では、神が「心をかたくなにするように」と命じておられるのに対し、マタイ 13 : 15 では、民の心の状況の客観的描写となっている。このような相違は、マタイが 70 人訳を引用しているからである。それでは、マタイはなぜ、マソレテ本文でなく、70 人訳を引用したのか。彼は 70 人訳しか知らなかったのか。そうではない。新約における旧約の引用は、マソレテ本文によるものと、70 人訳からのものと、どちらでもないものがある。例えば、マタイ 12 : 18-21 には、イザヤ 42 : 1-4 が引用されるが、これはマソレテ本文に非常に近い。それゆえ、マタイ 13 : 14-15 が 70 人訳によったのは、マタイが文脈にふさわしいほうを選んだと考えるほうが正しい。イザヤ 6 : 9-10 はイザヤの召命に焦点を当てており、イ

ザヤの宣教の内容および影響を、神からの命令の遂行という枠の中で叙述しているのであるが、マタイ 13:14-15 は、神のことばが人々の心に伝えられた時の、人間の側の反応に焦点を置いている。もともとイエスがこのたとえを語られた場合には、どのように話されたのであろうか。それは、イエスがアラム語を日常語としヘブル語聖書に親しんでおられたことと、共観福音書記者がかなり自由に「イエスのことば」を取捨選択しているところから、もともとはマソレテ本文に近い内容で、しかもイエスご自身が、かなり新しい引用方法で、従来の律法解釈から全く自由な意味を持たせつつ使用されたと考えるべきである。

マルコ 4:12 それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」

<sup>BNT</sup> **Mark 4:12** ἵνα βλέποντες βλέπωσιν καὶ μὴ ἴδωσιν, καὶ ἀκούοντες ἀκούωσιν καὶ μὴ συνιῶσιν, μήποτε ἐπιστρέψωσιν καὶ ἀφεθῆ αὐτοῖς.

次にマルコの福音書 4:12 では、「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」と、半分以下に要約されている。「民」という語はなくなり、一般群衆を指す「彼ら」に還元されている。「見る」と「聞く」は、順序が反対になっている。また、最後の「いやされる」が「赦される」になっている。マタイと比較すると、同じ種まきのたとえでも、マルコは、自分の立場に立って、このたとえの中でのイエスのことばを縮め、変更していることがわかる。その立場は、引用句の前後を比較することによって、かなり明らかに知ることができる(マタイ 13:14、16 とマルコ 4:11,13)。

ルカ 8:10 そこでイエスは言われた。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえで話します。彼らが見ていても見えず、聞いていても悟らないためです。」

<sup>BNT</sup> **Luke 8:10** ὁ δὲ εἶπεν ὑμῖν δέδοται γινῶναι τὰ μυστήρια τῆς βασιλείας τοῦ θεοῦ, τοῖς δὲ λοιποῖς ἐν παραβολαῖς, ἵνα βλέποντες μὴ βλέπωσιν καὶ ἀκούοντες μὴ συνιῶσιν.

ルカの福音書 8:10 は、イザヤ書 6:9-10 の最も簡単な断片的引用である。それだけにかえて、イエスに対する信仰と不信仰が、ユダヤ人と教会を分ける決定的な唯一の要素であることを鋭く示す結果になっている。また、使徒の働き 28:26-27 とローマ人への手紙 11章に示される新約の救済史の図式を暗示することにもなっている。

ヨハネ 12:40 「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」

<sup>BNT</sup> **John 12:40** τετύφλωκεν αὐτῶν τοὺς ὀφθαλμοὺς καὶ ἐπώρωσεν αὐτῶν τὴν καρδίαν, ἵνα μὴ ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ νοήσωσιν τῇ καρδίᾳ καὶ στραφῶσιν, καὶ ἰάσομαι αὐτούς.

ヨハネの福音書 12:40 は、共観福音書の種まきのたとえとは全く違った文脈である。種まきのたとえは、すでにイエスの宣教の初期において見られるのであるが、ヨハネ 12:40 は、イエスの生涯の最後の数日の記録の中で、イエスに対する人々の不信の態度の説明句となっている。種まきのたとえでは、イエスご自身のことばの中に引用されているが、ヨハネ 12:40 は、ヨハネ自身が説明する文章となっている。また、ヨハネ 12:40 は、その直前の 12:38 にあるイザヤ 53:1 の引用句と密接な関係を持つ。ヨハネにとって、イザヤ 6:9-10 と 53:1 は、同じイザヤのことばであるだけでなく、同じ内容を表現することばとして理解されたのである。その内容とは、「人々がイエスのしるしを見、イエスのことばを聞きながら、信じなかった」事実にはかならない。この事実を、ヨハネは、イザヤ 53:1 と 6:9-10 を引用しつつ、人間の側からではなく、主の経綸の立場から理解した。引用は 6:10 のみとなっているが、マソレテ本文でもなく、70 人訳でもなく、第三の引用と呼ぶべきものである。イザヤ書では、民の心をかたくなにする主人公は、イザヤであり彼の伝えるメッセージの内容であったが、種まきのたとえでは、心をかたくなにする主人公は民自身であった。ところがヨハネは、「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた」と言う。また、「耳」と「目」と「心」のうち、「耳」が省略されている。「民」ということばも省略され、「彼ら」に還元されている。また「立ち返る」は「回心する」となっている。ヨハネは、マソレテ本文でもなく、70 人訳でもなく、第三の本文から逐語的に引用したというよりも、ヨハネ自身が、文脈にふさわしく、引用聖句を自由に取捨選択し、変更したと考えられる。

使徒 28 : 26 『この民のところに行って、告げよ。  
あなたがたは確かに聞きはするが、  
決して悟らない。  
確かに見てはいるが、決してわからない。

<sup>BNT</sup> Acts 28:26 λέγων πορεύθητι πρὸς τὸν λαὸν τοῦτον καὶ εἰπὸν ἀκοῆ ἀκούσετε καὶ οὐ μὴ  
συνῆτε καὶ βλέποντες βλέψετε καὶ οὐ μὴ ἴδητε

使徒 28 : 27 この民の心は鈍くなり、  
その耳は遠く、  
その目はつぶっているからである。  
それは、彼らがその目で見、  
その耳で聞き、  
その心で悟って、立ち返り、  
わたしにいやされることのないためである。

<sup>T</sup> Acts 28:27 ἐπαχύνθη γὰρ ἡ καρδία τοῦ λαοῦ τούτου καὶ τοῖς ὠσὶν βαρέως ἤκουσαν καὶ  
τοὺς ὀφθαλμοὺς αὐτῶν ἐκάμμυσαν μήποτε ἴδωσιν τοῖς ὀφθαλμοῖς καὶ τοῖς ὠσὶν ἀκούσωσιν  
καὶ τῇ καρδίᾳ συνῶσιν καὶ ἐπιστρέψωσιν, καὶ ἰάσομαι αὐτούς.

使徒の働き 28 : 26-27 は、使徒の働きの最後の章の重大な締めくくりのことばになっている。使徒の働きは、ペンテコステからの初代教会の成立と発展の有様を記録しているが、今やこの書を閉じるにあたり、この引用句を起点とし軸として、新しい教会史の展開が始まることを告げる。イザヤ書 6 : 9-10 は、使徒の働き 28 : 26-27 に引用句として用いられることによって、教会の歴史を変える「ことば」となった。内容はマソレテ本文に最も近い形をとっている。新改訳ではかぎを使っていないが、28 : 26 の「あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない」にかぎをつけると意味が明瞭になる。26 節がイザヤの宣教メッセージとなっているのに対し、27 節は民の状況の叙述になっており、この点で、パウロは、イザヤから離れて種まきのたとえの線に沿っている。折衷的な立場と言えよう。

ローマ 11 : 8 こう書かれていますとおりです。

「神は、彼らに鈍い心と  
見えない目と聞こえない耳を与えられた。  
今日に至るまで。」

<sup>BNT</sup> **Romans 11:8** καθὼς γέγραπται ἔδωκεν αὐτοῖς ὁ θεὸς πνεῦμα κατανύξεως, ὀφθαλμοὺς τοῦ μὴ βλέπειν καὶ ὠτα τοῦ μὴ ἀκούειν, ἕως τῆς σήμερον ἡμέρας.

最後に、ローマ人への手紙 11 : 8 の文脈は、ユダヤ人が不信の民となり、それが契機となって全世界に福音が宣教されるようになった、ということである。神学的に言えば、「神の御国が与えられるのは、恵みによるのであって、行いによらない」ということで、「イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした」(ローマ 11 : 7)。それゆえ、ローマ人への手紙 11 : 8 は、ヨハネの思想と同一線上に立ち、「心をかたくなにする」主人公は、神であると言っている。この引用は申命記 29 : 4 からであるが、同時に、パウロがイザヤ書 6 : 9-10、29 : 10 を考えていたことは明らかである。こうして、申命記神学と、イザヤの神学と、次節(ロマ 11 : 9)に見られるダビデの神学が、「心をかたくなにする」イスラエル人に焦点を合わせて、出エジプト時代から統一王国時代を経て分裂王国時代を一貫しているのを見る。

以上の6箇所の研究を総合してみると、次の諸点が明らかにされる。

(1) イザヤ書 6 : 9-10 の引用は、新約における旧約本文の引用の仕方について重要な示唆を与えている。つまり、新約における旧約本文の引用は、マソレテ本文からのものと、70人訳からのものと、第三のものに大別される(あるいは、新約記者が、本文にかなりの変更を加えている)。

(2) 新約における旧約引用の原則には2つある。一つは、彼らが厳密なラビ的聖書解釈学に従って、一言一句を神のことばとして尊敬し、しばしば一語の解釈に重要な意味を持たせたこと(ガラ 3 : 16)。もう一つは、キリスト中心的な解釈で、キリストを指し示すために、ラビ的解釈を超え、一見不可能に見えるような変更や解釈を行なっていることである(ヘブ 2 : 13)。一例をあげると、イザヤ書 6 : 10 前半で、民の心のかたくなさは、「心」「耳」「目」という順序で記されていたが、ヨハネの福音書 12 : 40 では「目」「心」と順序を変更し、「耳」を省略した。それは、ヨハネの福音書の主題が「光」であり、12章の文脈がイエスのしるしを「見る」ことにほかならなかったからである。

(3)「心をかたくなにする」主人公は、イザヤ書 6：9-10 ではイザヤ自身であったのに、種まきのたとえでは群衆自身、ヨハネの福音書 12：40 では主なる神であり、パウロはそれらを折衷し総合した。「心がかたくなになる」という現象は、預言者の宣教活動と、聞く者たちの受け取り方と、すべてを支配する主なる神の摂理の三方面から見られるということである。更に、パウロが、ユダヤ人から全世界に福音宣教が拡大される転機の「ことば」としてとらえているのに対し、ヨハネは、イザヤ書 53：1 を並行引用することにより、民の側での「心のかたくなさ」と、神の側での「受難のしもべ像」を統一的にとらえた。「心のかたくなさ」とは、「受難のしもべ像」が提示されることによって触発される「心のかたくなさ」なのである。イエスを見て信じなかった「心のかたくなさ」と、イザヤの預言を聞いても信じなかった「心のかたくなさ」は、ヨハネの福音書 12：41 で「イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである」と説明されている。ここで、「・・・からで」は理由とか根拠を示している。イエスの時代の人々は、イエスを見たけれども信じなかった。一方、イザヤは、地上のイエスを見なかったが、イエスの栄光を見て信じた。それゆえ、イザヤが受けた「心をかたくなにするメッセージ」は、彼の見た「イエスの栄光」抜きには考えられないというのが、ヨハネの言おうとするところである。

(4)イザヤの受けた「心をかたくなにするメッセージ」は、すでに申命記 29：4、31：20、32：15 などに見られる。また、詩篇 69：22、23 に、ダビデによって表明されている。イザヤはこれを徹底化し、更に「受難のしもべ像」との有機的統合をはかったと言える。しかしそれは、イザヤの宗教的天才によるのではなく、彼に示された特別の啓示による。それが特別の啓示であったことは、イザヤ以後このような有機性を見ないところから知られる。エレミヤ書 5：21、6：10、エゼキエル書 12：2 などに「心のかたくなさ」の思想は現れるが、「受難のしもべ像」との有機的統合は現れていない。捕囚以後の旧約書巻や外典やクムラン文書にもない。この意味をもう一度鮮やかに示したのは、イエスであった。しかもイエスは、ご自身を「受難のしもべ」と同一化することにより、完全な統合を成就された。それゆえ、イザヤ書 6：11 のイザヤの質問、「主よ、いつまでですか」の意味は深いと言わなければならない。

11 節 私が、「主よ、いつまでですか」と言うと、主は仰せられた。  
「町々は荒れ果てて、住む者がなく、  
家々も人がいなくなり、  
土地も滅んで荒れ果て、

וְאָמַר עַד-מָתַי אֲדַנִּי וַיֹּאמֶר עַד אֲשֶׁר אִם-שָׂאוּ <sup>WTT</sup> Isaiah 6:11

עָרִים מֵאֵין יוֹשֵׁב וּבָתִּים מֵאֵין אָדָם וְהָאָדָמָה תִּשָּׂאָה

שְׂמֹמָה:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:11** καὶ εἶπα ἕως πότε κύριε καὶ εἶπεν ἕως ἂν ἐρημωθῶσιν πόλεις παρὰ τὸ μὴ κατοικεῖσθαι καὶ οἴκοι παρὰ τὸ μὴ εἶναι ἀνθρώπους καὶ ἡ γῆ καταλειφθήσεται ἔρημος

12 節 主が人を遠くに移し、  
国の中に捨てられた所がふえるまで。

וְרָחַק יְהוָה אֶת-הָאָדָם וּרְבֵה הָעֵזוּבָה בְּקֶרֶב <sup>WTT</sup> Isaiah 6:12

הָאָרֶץ:

<sup>LXT</sup> **Isaiah 6:12** καὶ μετὰ ταῦτα μακρυνεῖ ὁ θεὸς τοὺς ἀνθρώπους καὶ οἱ καταλειφθέντες πληθυνθήσονται ἐπὶ τῆς γῆς

13 節 そこにはなお、十分の一が残るが、  
それもまた、焼き払われる。  
テレビンの木や樅の木が  
切り倒されるときのように。  
しかし、その中に切り株がある。  
聖なるすえこそ、その切り株。」

וְעוֹד בָּהּ עֲשָׂרִיָּה וְשִׁבְהָ וְהִיְתָה לְבָעַר כְּאֵלֶּה <sup>WTT</sup> Isaiah 6:13

וְכֵאלֶּזֶן אֲשֶׁר בְּשִׁלְכָתָּ מִצְבַּת בָּם זֶרַע קֹדֶשׁ מִצְבַּתָּה: פ

LXT **Isaiah 6:13** καὶ ἔτι ἐπ’ αὐτῆς ἔστιν τὸ ἐπιδέκατον καὶ πάλιν ἔσται εἰς προνομὴν ὡς  
τερέβινθος καὶ ὡς βάλανος ὅταν ἐκπέσῃ ἀπὸ τῆς θήκης αὐτῆς

イザヤが「ここに、私がおります。私を遣わしてください」と言った時、それは、たといその宣教のわざがどれほど困難であっても従います、という決意の表明であった。しかし、一方において、預言者はあくまでも人の子であり、国を愛し、同胞を思う気持ちに変わりはない。「聞いても悟るな」と説教せよ、そして、宣教の結果、民の心をかたくなにすることを目標にせよ、との主の命令は、若いイザヤにとっては、あまりにも過酷な使命であった。主の命令に従う決意には変わりがない。彼は出かける。しかし、<主よ、いつまでですか>と質問したイザヤが期待した答えは、数ヶ月、あるいは長くて数年であったと思われる。しかし、主の答えは彼の期待を全く裏切るものであった。それは、ユダの地が全く荒れ、人々が捕囚の地に連れ去られる時までであった。これは、前 587 年のネブカデレザルによるエルサレム陥落とバビロン捕囚の日にもまず成就した。しかし、この時の青年イザヤには、国の滅亡が自分の生涯の中に起こるか、死後のことかは不明であった。彼にとっては、年月の長さよりも、事件の過酷さ、徹底的な悲劇性として、宣教事業の終着駅が示されたわけである。

しかし、そこには一つの希望がある。それは「残りの者」の思想である（ 4：3 注解）。13

節前半は徹底的な破滅であるが、後半に<聖なるすえ>ということばが出て来る。עֲרֵבִים

ラは、「種」「子孫」「すえ」「種族」と訳すことができ、単数でも集合名詞として用いられる。それゆえ、ここで、一人のすえ、メシヤを指しているのか、複数の「イスラエルの残りの者たち」を意味しているのか、文法上からは確定できない（ 創 3：15、13：15、17：8、ガラ 3：16）。70 人訳はこの部分を省略しているので、参考にすることができない。イザヤ書 1：9、4：3 の継続と見れば、集合名詞にとるべきであるが、7：14、9：6-7、11：1-5 と後へかけてゆけば、単数である。